様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ９ 月　 ５ 日現在

機関番号：１３２０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２０７３

研究課題名（和文）アウグスティヌスにおける言語理論に基づく神学の形成

研究課題名（英文）The formation of Augustine's theology based on his theory of language

研究代表者
佐藤　真基子（Sato, Makiko）

富山大学・教養教育院・教授

研究者番号：３０５７２０７８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、「西洋古代末期において、キリスト教神学がどのような思考過程を経て形成され、中世以降のキリスト教世界の基盤となる神学に発展したか」を明らかにするという目的のもと、古代キリスト教教父アウグスティヌスの思想における言語理論の展開を分析することによって、その理論が神学を形成していく思考の実態を解明した。これによって、アウグスティヌスがその言語理論を展開しながら、初期から後期に至るまで一貫して「嘘」の概念に注目していること、そしてその概念の深化が固有の人間理解を形成していること、その人間理解が、「原罪」など中世以降に大きな影響を及ぼしたキリスト教神学の議論に直接寄与していることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：With the aim of clarifying what kind of thought processes contributed to Christian theology in Late Antiquity and developed into the theological basis of Christianity after the Middle Ages, this study analyzed how Augustine of Hippo’s theory of language evolved from his early to his later works and how the theory connects with his theology. This study clarified that Augustine focused on the concept of lying consistently throughout his works and that a deepening of the concept related to his anthropology. Augustinian anthropology provides the foundation for the Christian theology, especially the idea of “original sin” that influenced Christianity beginning in the Middle Ages.

研究分野：思想史

キーワード：アウグスティヌス　教父　キリスト教　嘘　罪　言語

１．研究開始当初の背景

アウグスティヌスの言語理論は、20 世紀後半の思想潮流における記号論や解釈学への関心の高まりとともに注目を集め、急速に研究が進展した。記号論を端緒に聖書解釈論を論じている『キリスト教の教え』については、20 世紀末に本著作を主題とする国際会議も開催されるなど、活況を呈した（Duane W. H. Arnold and Pamela Bright (eds.), *De doctrina christiana: A Classic of Western Culture*, Notre Dame (1995)）。しかし「言語理論」と言っても、アウグスティヌスは言葉を主題とする体系的な議論を提示しているのではないため、初期から中期著作の中で部分的に論じられる、言葉や記号についての議論を抽出する手法によって分析が進められてきた。

たしかにこの手法には、アウグスティヌスの言語理論と他の言語理論の比較を容易にする利点がある。しかしこの手法によっては、アウグスティヌスが言葉について論じる本来の意図を見落とし、その思想の実態を正確に把握できないと本研究者は考えた。そこで、先行研究では言語理論の分析対象とされていない『キリスト教の教え』第 1 巻の神学的議論を分析し、アウグスティヌスが神学的議論と言語理論を関係づけることによって、神に向かう人間の志向性に解釈の正しさの基準を見出す独自の聖書解釈論を形成していることを明らかにした（「アウグスティヌスにおける聖書解釈と愛の概念」『中世思想研究』47 (2005)176-182）。

また、初期から中期の著作において、言語理論を出発点とする「嘘」の概念についての議論を分析することよって、その理論が、人間を「嘘」の罪から免れ得ない存在とみなす原罪論、罪からの解放をキリストに見出すキリスト論に展開していることを明らかにした（「『心の口』で語るとはいかなることか―アウグスティヌス *De mendacio* における」『中世哲学研究』26 (2007) 62-73、「アウグスティヌス『告白』第 10 巻における自己欺瞞の理解」『中世思想研究』53 (2011) 59-75）。これらの研究を通して、言語理論を手がかりとして神学の形成過程を解明しうるという見通しを得た。

欧米では 2008 年の Phillip Cary の研究が、アウグスティヌスの言語理論が神学を形成していることを指摘した画期である（*Outward Signs: The Powerlessness of External Things in Augustine's Thought*, Oxford (2008)）。彼は、アウグスティヌスの言語理論の独自性を指摘するとともに、その理論が「人間キリスト」の理解、サクラメントの理解を形成していることを明らかにした。しかし Cary の研究は、言語理論とキリスト論の関係に注目しつつも、「ヨハネ福音書」に由来する「言葉＝キリスト」論の理解については検討していない。じっさい、アウグスティヌスのヨハネ解釈については、2011 年の H.A.G. Houghton による研究（*Augustine's Text of John: Patritic Citations and Latin Gospel Manuscripts*, Oxford (2011)）がその先駆と言えるほど、パウロ解釈と比べ研究が遅れている現状がある。

以上の研究状況をふまえ、本研究者は、アウグスティヌスにおける言語理論に基づく神学形成の全体像を明らかにするためには、これまで言語理論の研究対象として十分に分析されてこなかった、中期から後期著作の分析が課題であると認識した。この課題に取り組み、アウグスティヌスの思想が初期から後期にかけてどのように展開し、後のキリスト教思想の土台となる神学を形成したかを解明するため、本研究を企画した。

２．研究の目的

先述のとおり、本研究者は本研究に先立ち、『嘘論』(395 年)、『告白』(397-401 年)、『キリスト教の教え』(398 年頃。第四巻は 426 年)など、アウグスティヌス初期から中期にかけての著作を中心に、言語理論が彼独自の神学を形成する過程を明らかにしてきた。この成果をふまえ、本研究では、『三位一体論』(399-419 年)、『キリスト教の教え』第 4 巻、『嘘駁論』(420 年)、『信仰・希望・愛』(421-423 年)、『神の国』(413-427) など、中期から後期の著作を中心に、それらにおける言語理論の展開を分析し、その理論が神学とどのように関係づけられているかを解明することを目的とした。とくに、人間の言語行為の分析を通してアウグスティヌスが「嘘」の概念に関心を寄せて論じていることに注目し、その議論が彼の初期および中期著作においてキリスト論に発展していることを明らかにした、本研究者のこれまでの研究成果をふまえ、彼の後期著作を中心に、「嘘」をめぐる議論が神学に展開していく過程がどのように変容しているか（あるいは変容していないか）に焦点を当てて分析する。それによって、アウグスティヌスが初期から取り組んできた言語理論がその円熟期にどのように展開したか、そしてその理論はどのように神学の形成に寄与したか、さらにその神学はどのように展開したかを総合的に検証する。

３．研究の方法

アウグスティヌス初期から中期にかけての言語理論、およびそれに基づく神学の形成過程を分析してきたこれまでの研究を手がかりとして、本研究では中期から後期にかけての言語理論と、それに基づく神学の形成過程を、原典テキストの分析によって検証した。テキスト分析においては、コンピューター・データベースを使うことによって、思想の展開の可能性を検証するとともに、用語法の変化、古代末期の他思想からの影響にも注意を払って行われた。

さらに、研究成果は、随時国内外の学会で

発表することによって、常に専門家らとの意見交換を通して検証しなおしながら、目的達成に向けて遂行された。

４．研究成果

(1) 2015 年度

研究初年度にあたり、基本的文献の整備に取り組みながら、アウグスティヌスの初期から後期にかけての思想展開の結節点とも言える中期著作『告白』の、とくにその最終巻のテキスト分析を通して、言葉の役割についての彼の理解を明らかにすることに取り組んだ。そして、この『告白』最終巻（第 13 巻）における詩編解釈を手掛かりに、言葉の役割についてのアウグスティヌスの考察がパウロ解釈およびその人間観と密接に関係づけて考えられていることを明らかにし、その成果を、5 月にデンマーク・オーフス大学で開催された研究セミナーで発表した[05]。この研究発表を機に得られた各国専門家らとの意見交換を参考にしながら、同じテキストについてさらに研究を進め、旧約聖書における「闇」や「淵」の概念が、アウグスティヌスにおいてその人間理解の形成に関係していること、そしてその人間観に基づいて、アウグスティヌスが「告白」という言語行為に固有の意味を見出していることを明らかにした。この研究成果は、8 月にイギリス・オックスフォード大学で開催された XVII International Conference on Patristic Studies で発表した[06]。発表後は、Gabor Kendeffy 博士をはじめとする初期キリスト教の専門家らの助言と情報提供を受けながら論文にまとめ、学会誌 *Studia Patristica* に投稿、公刊された[04]。

9 月以降は、アウグスティヌス『三位一体論』における言語理論の研究に着手した。そしてその第 15 巻における言語理論に、彼の初期著作における言語論とは区別される議論の特徴があることを示した。そしてその議論が彼のキリスト理解と関係していることを指摘した。この成果は、慶應義塾大学言語文化研究所紀要に掲載された[02]。さらにこの研究を通して課題として見出された、『キリスト教の教え』第 4 巻における「生き方 (forma vivendi)」の概念について分析を進め、この概念が中世以降の修道思想に影響を与えていることを指摘した。この成果は、3 月にオーストラリア・ブリズベンで開かれたオーストラリア・カトリック大学初期キリスト教研究センターの研究集会で発表した[07]。

(2) 2016 年度

本研究中間年度においては、アウグスティヌス後期の著作分析を中心に、彼の言語理論と人間論および神学的議論との関係の分析を行った。はじめに、昨年度取り組んだアウグスティヌス『三位一体論』における「言葉」の概念の三区分についての分析をさらに進め、本書におけるアウグスティヌスの言語理論の特徴を示すとともに、人間のつく嘘と神のそれの違いについての彼の理解の固有性を分析した。そしてその成果を、5 月にアメリカ・シカゴで開催された The North American Patristics Society 年次学会で発表した [08]。さらに 8 月には、アウグスティヌス『神の国』および『嘘論』等の著作の議論分析をもとに、彼の倫理思想の背景に、後期著作においてもなお新プラトン主義に由来する心身理解があることを明らかにし、その成果をデンマーク・セナボーで開催された国際学会 “Beyond We and Them: Decolonizing Greco-Roman and Biblical Antiquities” で発表 [09]、その後論文にまとめ、オーフス大学から発行予定の論文集（Dr. Karmen MacKendrich 責任編集）に投稿、査読済、編集中である。さらに 9 月には、アウグスティヌスにおける自己愛の概念分析を、初期から後期著作にかけて網羅的に行い、彼の初期著作と後期著作の間の議論の変化、彼の人間観とキリスト論の関係ついて検討し、その成果を Asia-Pacific Early Christian Studies Society 第 10 回年次学会で発表した。この成果はベルギー・ルーヴァン・カトリック大学の Anthony Dupont 博士の助言を仰ぎながら、論文としてスペインの学会誌 *La Ciudad de Dios* に掲載された [03]。年度末の 2 月には、本年度 8 月と 9 月に国際学会で発表した成果をもとに、上智大学中世思想研究所主催講演会「教父の聖書解釈から考える『原罪と女性』」において講演を行った。

(3) 2017 年度

本研究最終年度においては、先行年度内に行った研究をふまえ、アウグスティヌスの「原罪」概念に基づく人間理解と「嘘」をめぐる言語論の結節点を明らかにする研究に取り組んだ。はじめに、アウグスティヌスにおいて、創世記解釈が彼の嘘論の土台の一つとなっているという見通しのもと、初期著作の一つ『マニ教徒に対する「創世記」注解』を分析した。そしてそこで提示されている解釈が、人間は自らに嘘をつくあり方をもつが故に自らを知ることができず、自力では救われないと論じる中期著作『告白』の議論とすでに一致していることを明らかにした。この研究は、"Deception and self-knowledge in Augustine’s interpretation of the paradise myth"と題して 7 月に国際学会で発表 [11]、その後、発表セッションのオーガナイザー Diana Satanciu 博士および Andrea Bizzozero 博士を編者とする論文集に掲載予定である。

続いてこの成果に基づき、中期著作以降、「嘘」を人間の本性とみなす人間観がどのように展開しているかを分析した。その結果、後期著作においては、「あらゆる人間は嘘つきである」という初期著作では引用されていない聖書の言葉が重視されており、人間本性としての「嘘」の概念がアウグスティヌスの

原罪論の軸となっていることを明らかにした。この成果は"Lying as a human nature: Augustine's concept of lie in the Pelagian controversy"と題して 9 月に国際学会で発表した [12]。さらに、これら二つの研究を総括する発表を、11 月に国内学会のシンポジウムで行った。[13]この報告原稿は『中世思想研究』第 60 号に投稿済、2018 年 9 月発行予定である。 また、アウグスティヌスにおける性差の概念が聖書解釈を土台としながら彼独自の原罪に基づく人間観と密接に関係していることを、「アウグスティヌスと女性――性欲、女性性、友愛」と題し、『愛と相生』（教友社、2018 年）に掲載した[17]。

この、本研究最終年度の成果を通して、アウグスティヌスが人間の本性についての洞察において性差の概念を人間の内面性に適用していることを見出し、こうした性差の理解が後世にも影響を及ぼしているとの見通しを得た。こうした性差についての理解がどのような思想的影響のもとで形成され、どのような思考過程を経て深化しているかについて解明することは、性差（ジェンダー）をめぐる現代的問題にも示唆を与え得るものであり、目下の研究課題として着手し始めたところである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 4 件）

[01] Makiko Sato, "The Prohibition of Suicide for Affirmation of Human Beings by Augustine," *Scrinium: Journal of Patrology and Critical Hagiography,* vol.11 (1), Leiden: Brill, 2015, 135-142.

[02] 佐藤真基子、「言語理論に基づくキリスト論の形成：アウグスティヌス『三位一体論』第 15 巻を中心に」、『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第 47 号、2016 年、49-62 頁。

[03] Makiko Sato, "Almsgiving to Oneself: The Development of the Idea of Self-love in Augustine," *La Ciudad de Dios,* CCXXX. Núm. 1, 2017, 5-14.

[04] Makiko Sato, "Confession of a Human Being as Darkness in Augustine," *Studia Patristica* XCVIII: *St Augustine and His Opponents,* Leuven: Peeters, 2017, 589-598.

〔口頭発表〕（計 9 件）

[05] Makiko Sato, "Invocation of Depth as resonance: Augustine's Interpretation of Ps. 41,8" A Seminar on Mysteries of Matter: Music and Meaning, Monsters, and Material Mysticism" given by Prof. Karmen MacKendrick (Le Moyne College), Aarhus University, Denmark, 2015 年 5 月 21 日.

[06] Makiko Sato, "Confession of Human Being as darkness in Augustine" XVII International Conference on Patristic Studies, Oxford University, Oxford, UK, 2015 年 8 月 14 日.

[07] Makiko Sato, "*Forma vivendi* in the Forth book of Augustine's De Doctrina Christiana," Planning Meeting For Programme 'Agency and Power in Early Christian Social and Church Issues', Centre for Early Christian Studies Australian Catholic University, Brisbane, Australia, 2016 年 3 月 4 日.

[08] Makiko Sato, "Can the World Not Lie?: The Concept of *verbum* in Augustine's *On the Trinity* Book XV," The North American Patristics Society (NAPS) Annual Meeting 2016, Hyatt Regency Chicago, Chicago, US, 2016 年 5 月 28 日.

[09] Makiko Sato, "The Suicide of Lucretia: the Sanctity of Body and Soul", International Conference "Beyond We and Them: Decolonizing Greco-Roman and Biblical Antiquities", Aarhus University Conference Centre at Sandbjerg Estate, Denmark, 2016 年 8 月 10 日.

[10] Makiko Sato, "Almsgiving to Oneself: An Examination of Augustine's Interpretation of the Order of Love", Asia-Pacific Early Christian Studies Society Tenth Annual Conference, University for Aerospace Instrumentation, St Petersburg, Russia, 2016 年 9 月 9 日.

[11] Makiko Sato, "Deception and Self-knowledge in Augustine's Interpretation of the paradise myth", 10ème Édition du Congrès Celtiaue en Études Classiques (Celtic Conference in Classics), Montréal, 2017 年 7 月 22 日.

[12] Makiko Sato, "Lying as a human nature: Augustine's concept of lie in the Pelagian controversy," Asia-Pacific Early Christian Studies Society, 11th Annual Conference: Early Christian Responses to Conflict, Australian Catholic University, Melbourne, Australia, 2017 年 9 月 24 日.

[13] 佐藤真基子「アウグスティヌスにおける楽園神話解釈に基づく人間観の形成――「嘘」の概念に注目して」、第 66 回中世哲学会大会　シンポジウム「中世における原罪論の諸相――教父の聖書解釈を中心に――」提題、岡山大学、2017 年 11 月 12 日.

〔図書〕（計 4 件）

[14] 『神と生命倫理』（共著）、古牧徳生、浦英雄、次田憲和、佐藤真基子、山口雅広（佐藤真基子「自殺あるいは安楽死――死を選ぶとは何を選ぶことなのか―― 」、67-95 頁）、晃洋書房、2016 年。

[15] 『西洋教育思想史』（共著）、眞壁宏幹 他（佐藤真基子：第 1 章「古典古代の教育思想」第 1,2 節, 第 2 章「中世の教育思想」第 1,2 節、20-51 頁）、慶應義塾大学出版会、2016 年。

[16]『読書空間、または記憶の舞台』（共著）、20 世紀文学研究会 （佐藤真基子、「翼としての 文学――エンデ、カルヴィーノ、オウィディウス」、51-64 頁）、風濤社、2017 年。

[17] 『愛と相生 エロース・アガペー・アモル』宮本久雄編著（佐藤真基子「アウグスティヌスと女性――性欲、女性性、友愛」、143-171 頁）、教友社、2018 年。

６．研究組織

(1)研究代表者

佐藤 真基子（SATO, Makiko）
富山大学・教養教育院・教授
研究者番号： ３０５７２０７８